

SYSTEM:OS - DIALOG OneSearch

File 350:Derwent World Pat. 1963-1980/UD=9604

(c) 1996 Derwent Info Ltd

File 351:DERWENT WPI 1981-1995/UD=9604;UA=9551;UM=9544

(c)1996 Derwent Info Ltd

38/29/2 (Item 2 from file: 351)

DIALOG(R)File 351:DERWENT WPI

(c)1996 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

009894078 WPI Acc No: 94-173994/21

XRAM Acc No: C94-079715

XPX Acc No: N94-137064

Hindered phenol deriv. light stabiliser for phenolic cyanine colourant

- for incorporation into optical recording medium

Patent Assignee: (MITK ) MITSUI TOATSU CHEM INC

Patent Family:

CC Number	Kind	Date	Week	
JP 6116556	A	940426	9421	(Basic)

Priority Data (CC No Date): JP 92271474 (921009)

Abstract (Basic): JP 06116556 A

Hindered phenolic light stabiliser of formula (I) for phenolic cyanine colourant is new. In (I), R = (cyclo)alkyl, alkoxyalkyl, opt. subst. phenyl, or aralkyl.

Optical recording medium contg. new light stabilising agent is also new.

USE/ADVANTAGE - The light stabiliser may be incorporated into optical recording medium showing improved light stabilising property.

Dwg.0/0

(19)日本国特許庁(JP)

(12)公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-116556

(43)公開日 平成6年(1994)4月26日

(51)Int.Cl.<sup>5</sup>

識別記号

庁内整理番号

FI

技術表示箇所

C 0 9 K 15/08

審査請求 未請求 請求項の数2(全 8 頁)

(21)出願番号 特願平4-271474

(22)出願日 平成4年(1992)10月9日

(71)出願人 000003126

三井東圧化学株式会社

東京都千代田区霞が関三丁目2番5号

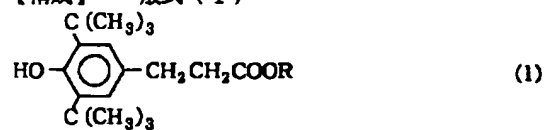
(72)発明者 詫摩 啓輔

福岡県大牟田市平原町300番地

(54)【発明の名称】 フェノール系シアニン色素の光安定化剤及び該光安定化剤を含有する光記録媒体

(57)【要約】

【構成】 一般式(1)



で表されるビスフェノール系シアニン色素の光安定化剤及びそれを含有する光記録媒体。

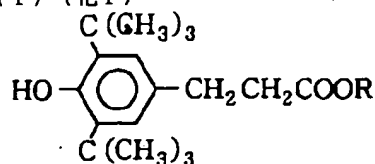
【効果】 取扱いが簡単で安全性が高く、シアニン色素に対する光安定化効果が非常に優れた光安定化剤であり、耐光性に優れた光記録媒体を提供できる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 一般式(1)(化1)

\*【化1】

\*



(1)

〔式中、Rはアルキル基、シクロアルキル基、アルコキシアルキル基、置換されていてもよいフェニル基、またはアラルキル基を示す。〕で表されるフェノール系シアニン色素の光安定化剤。

【請求項2】 請求項1記載の一般式(1)(化1)で表されるフェノール系シアニン色素の光安定化剤を含有する光記録媒体。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明はシアニン色素の光安定化剤及びそれを含有する光記録媒体に関するものである。

【0002】

【従来の技術】光記録媒体いわゆる光ディスクにおいてシアニン色素の薄膜を記録層として用いたものが実用化されている。ここで用いられるシアニン色素は単独では光安定性が悪く、光安定化剤を添加して使用する必要がある。

【0003】光安定化剤としてチオ配位子を有するニッケル化合物などの金属錯体を用いた方法が、特開昭59-219852号、特開昭62-193891号、特開昭62-207688号、特開昭63-19293号、特開昭63-199248号に示されている。この方法は光によって生成する反応性の高い一重項酸素を失活させ、三重項酸素に戻す機構を利用したものであるが、長時間光にさらされるとシアニン色素の分解がかなり進行するという問題点を有する。

※【0004】また、他の光安定化剤として、ニトロソ化合物を用いた方法が、特開平2-300287号、特開平2-300288号、特開平2-300289号に示されている。しかし、このニトロソ化合物類は、それ自体毒性が強い、あるいは光分解物の毒性が強い等の問題を有しているものが多く、ニトロソ化合物を使用する上で人体に対する安全対策が必要である等、好ましくない性質を有している。

【0005】さらに、光安定化剤としてトリニトロフェニルヒドラジル遊離基を有する化合物を用いる方法が、特開平2-304055号に示されている。しかし、トリニトロフェニルヒドラジル遊離基を有する化合物は、爆発性を有しており、取り扱い上、非常に問題である。

【0006】

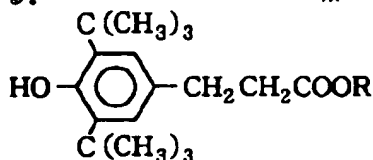
【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、これらの問題点を解決した光安定化剤、すなわちシアニン色素の光安定性を向上させ、取り扱いが簡単で、しかも安全性の高い光安定化剤を提供することである。また、本発明の別の目的は、耐光性に優れた光記録媒体を提供することである。

【0007】

【発明を解決するための手段】本発明者らは、上記課題を解決すべく、鋭意検討した結果、一般式(1)(化2)

【0008】

【化2】



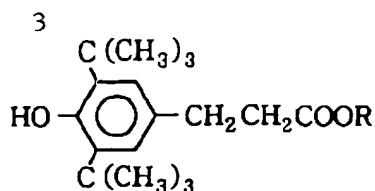
(1)

【0009】〔式中、Rはアルキル基、シクロアルキル基、アルコキシアルキル基、置換されていてもよいフェニル基、またはアラルキル基を示す。〕で表されるフェノール誘導体が、シアニン色素の光安定性を極めて向上させ、しかも取り扱いが簡単で、かつ安全性の高い性質★

★を有することを見出し、本発明を完成した。すなわち、本発明は一般式(1)(化3)

【0010】

【化3】



【0011】〔式中、Rはアルキル基、シクロアルキル基、アルコキシアルキル基、置換されていてもよいフェニル基、またはアラルキル基を示す。〕で表されるフェノール系シアニン色素の光安定化剤及び該光安定化剤を含有する光記録媒体である。

【0012】以下、本発明を詳しく説明する。本発明の一般式(1)(化3)におけるRの具体例としては、メチル基、エチル基、n-プロピル基、i-プロピル基、n-ブチル基、n-ペンチル基、n-ヘキシル基、n-オクチル基、n-デシル基、n-ドデシル基、n-オクタデシル基等のアルキル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロオクチル基等のシクロアルキル基、メトキシエチル基、エトキシエチル基、メトキシプロピル基、エトキシプロピル基、n-オクタデシルオキシエチル基等のアルコキシアルキル基、ベンジル基、2-フェニルエチル基、3-フェニルプロピル基、2-フェニルプロピル基等のアラルキル基、フェニル基、2-メチルフェニル基、4-メチルフェニル基等\*

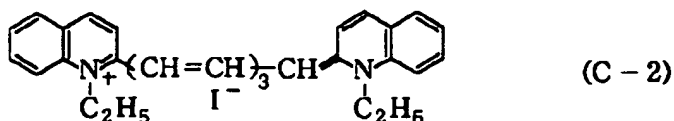
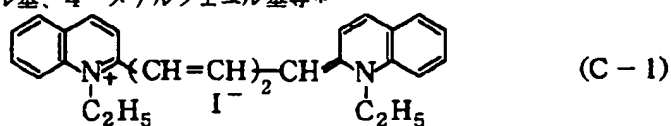
\*の置換されていてもよいフェニル基を挙げることができる。

【0013】本発明の光安定化剤の具体的代表例を第1表(表1~2)に示す。これらのシアニン色素の光安定化化合物は、一種類もしくは二種類以上の組み合わせによっても使用できる。

【0014】光安定化剤の使用量は通常シアニン色素に対して、通常、0.01~3.0モル比である。さらに3.0モル比以上を用いてもよいが、シアニン色素の色素濃度が低くなり、吸光度が低くなるため、用途によっては不都合を生じる場合がある。また、使用量が少ない場合には効果が明確でないことがある。一方、光安定化の対象となるシアニン色素は、特に限定されるものではないが、具体的には下記(C-1~C-21)(化4~化7)に示される化合物が例示される。

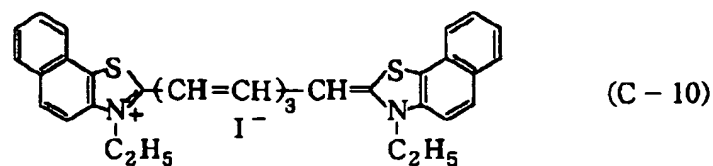
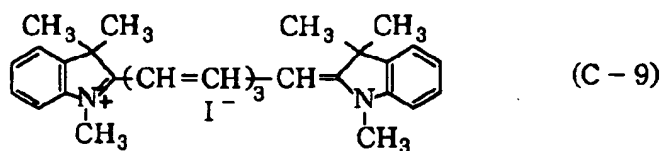
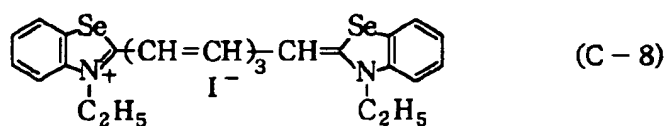
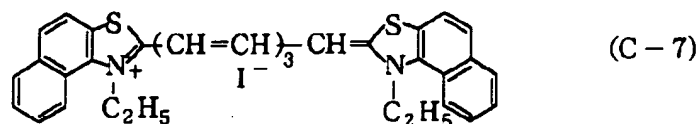
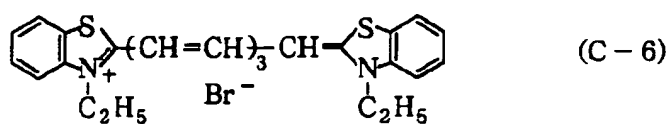
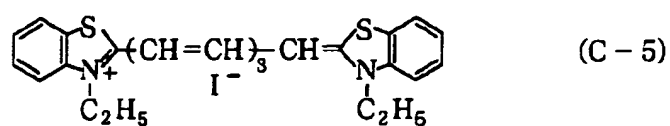
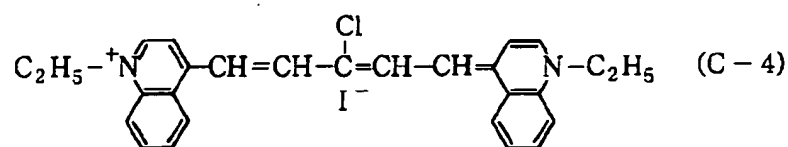
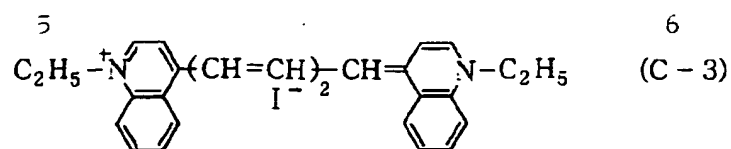
【0015】

【化4】



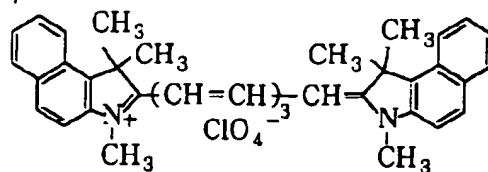
【0016】

※ ※【化5】

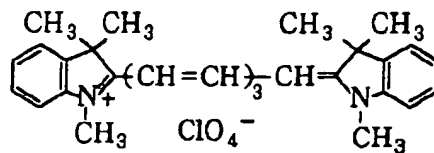


7

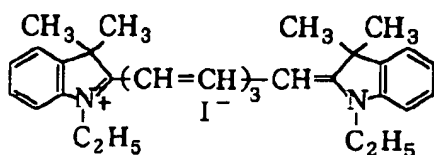
8



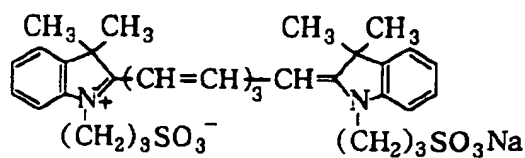
(C-11)



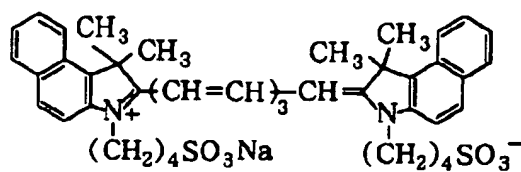
(C-12)



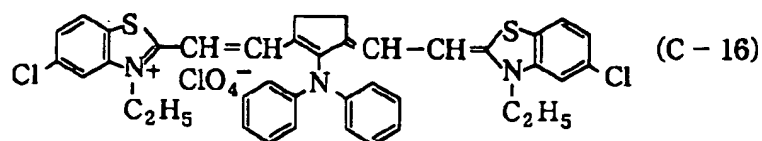
(C-13)



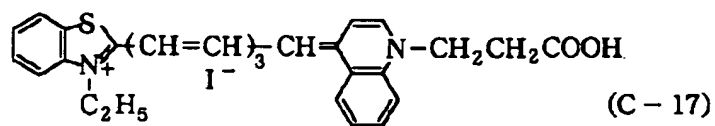
(C-14)



(C-15)



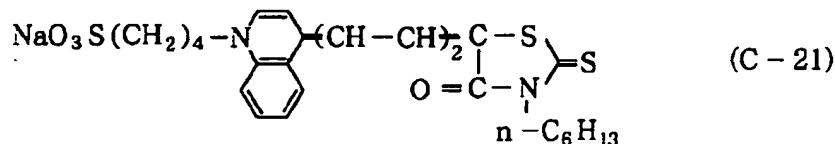
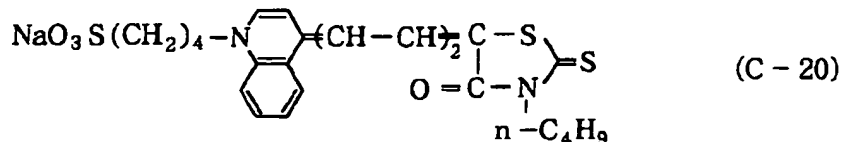
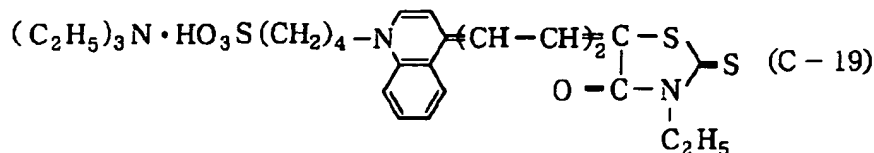
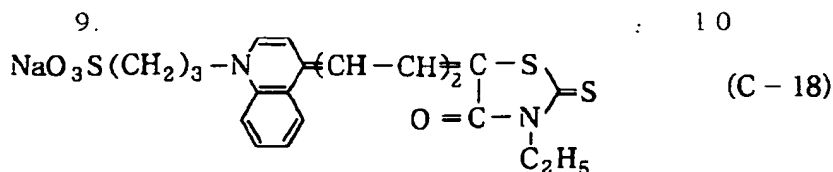
(C-16)



(C-17)

【0018】

\* \* 【化7】



【0019】本発明におけるフェノール誘導体は、シアニン色素の薄膜を記録層として用いる光記録媒体中に光安定化剤として添加使用することができる。これらの光安定化剤を光記録媒体に適用する場合、色素とともに各種溶剤に溶解後、記録媒体の基盤に塗布し薄膜を形成するなどの方法によって行うことができる。

【0020】

【実施例】以下、本発明を実施例によりさらに詳しく説明する。実施例における被着色体としては、通常、光記\*

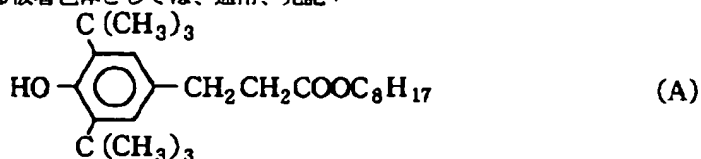
\* 録媒体の基盤として用いるポリカーボネート板としたが、ガラスやポリメタアクリレートなどの他の基盤を用いても同様な結果が得られる。

【0021】実施例1

シアニン色素(C-1)3gおよび下記フェノール化合物(A)(化8)

【0022】

【化8】



【0023】2gをエタノール100g中に入れ1時間室温下で攪拌した後、メンブランフィルター(東洋濾紙製PTEE, ポアサイズ1.0μm)を用いて濾過し、色素溶液を得た。本色素溶液をポリカーボネート板基盤上にスピンコート法によって塗布した。この着色ポリカーボネート基盤を耐光試験器(入江製作所製DR400T)内で20cmの距離から光照射した。10時間光照射後のシアニン色素の吸収極大波長715nmにおける退色率は14.7%と良好な結果であった。

【0024】実施例2〜21

実施例1と全く同様にして、シアニン色素とフェノール化合物の組み合わせを代えて行った。結果を第1表(表1〜2)に示すが、いずれも実施例1同様、良好な結果※

※を得た。

【0025】比較例1

実施例1において、フェノール化合物を全く添加せずに行ったところ、第1表(表2)に示すようにシアニン色素がかなり分解した。

【0026】比較例2

実施例1において、フェノール化合物(A)(化8)の代わりに2,6-ジ-tert-ブチル-4-メチルフェノールを用いて行ったところ、第1表(表2)に示すようにシアニン色素がかなり分解した。

【0027】

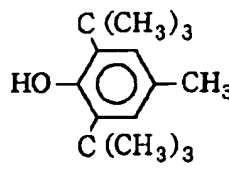
【表1】

第1表

実施例	光安定化剤	シアニン色素	10時間後の 光退色率(%)
	一般式(1)のR置換基		
2	エチル基	C-2	15.2
3	i-プロピル基	C-3	15.3
4	n-ブチル基	C-4	15.5
5	n-ヘキシル基	C-5	15.4
6	n-デシル基	C-6	16.1
7	n-オクタデシル基	C-7	16.3
8	シクロブチル基	C-8	14.9
9	シクロヘキシル基	C-9	15.3
10	シクロオクチル基	C-10	15.4
11	メトキシエチル基	C-11	15.5
12	エトキシエチル基	C-12	15.0
13	メトキシプロピル基	C-13	15.1
14	エトキシプロピル基	C-14	15.1
15	n-オクチルオキシエチル基	C-15	16.0
16	ベンジル基	C-16	15.7



第1表(続き)

実施例	光安定化剤 一般式(1)のR置換基	シアニン色素	10時間後の 光退色率(%)
17	2-フェニルエチル基	C-17	15.6
18	3-フェニルプロピル基	C-18	15.6
19	フェニル基	C-19	16.2
20	4-メチルフェニル基	C-20	16.3
21	2-メチルフェニル基	C-21	16.2
比較例	光安定化剤	シアニン色素	10時間後の 光退色率(%)
1	—	C-1	42.0
2		C-1	39.1

【0029】

【発明の効果】本発明のフェノール系化合物は、取り扱いが簡単で、安全性が高く、しかもシアニン色素に対する光安定化効果が非常に優れた光安定化剤である。ま \*

\*た、近年需要の高い光記録媒体の光安定化剤としても有効であるので、耐光性に優れた光記録媒体を提供することができる。